

令和元年6月13日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02622

研究課題名(和文) 東濃西部方言プロソディの音声学的研究

研究課題名(英文) A phonetic study on prosody of the Tono dialect

研究代表者

安藤 智子 (Ando, Tomoko)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：00345547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：東濃(岐阜県南東部)西部の方言の総合的な記述の一環として、音声的特徴について資料を収集し、分析を行った。最初に読み上げ式の音声録音により文中の語アクセントの記述を行った。それにより、京阪式の要素を含む内輪式東京式アクセントの性格が強いことを明らかにした。次に談話音声資料を収集し、そのリズムやイントネーションの特徴を音響分析を用いて統計的に解明した。明らかになった特徴の主な点は、冷静な発話においても文頭拍が延伸することと、頭高型以外の文頭のイントネーションの上昇が遅いことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義のひとつは、東日本方言と西日本方言の間に位置し、しばしば似非関西弁などの呼ばれることのある東濃地方(岐阜県南東部)の方言がどのような点でどちらと共通する特性を持つか、どちらとも異なる独自の特徴は何かを明らかにする点にある。また同時に、これまであまり注目されてこなかったマイナーな方言に光を当てることにより、共通語との違いや地域の文化としての方言の特徴を市民に知らしめることができ、地域の文化活動や教育に貢献するという社会的意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：As a phonetic field of inclusive description of the dialect in the western part of Tono (the southeastern region of Gifu prefecture), we collect sound data and performed analytic examinations. As a result of the survey, we got two findings. Firstly, it became clear that the accentual system of the dialect is based on the Tokyo accent and has also some properties of Keihan accent. Secondly, we found prosodic properties of initial position of each clause through acoustic analyses that the initial moras are long and that initial pitch rising appears relatively late.

研究分野：言語学

キーワード：プロソディ 方言 岐阜 遅上がり

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

岐阜県南東部に当たる東濃地方は、交通の便や陶磁器産業の関係で岐阜市方面(西濃地方)よりも名古屋市や瀬戸市など愛知県との関わりが強く、特にその玄関口である多治見市はその傾向が強い。このため、東濃のなかでも特に多治見市などの西部はことばのうえでも尾張方言の影響を受けやすい位置にあると言える。実際に、1970年代に記録された方言語彙の半数程度が、多治見市の古くからの地域の高齢層にも用いられなくなっている。さらに近年は名古屋市等に通勤・通学可能なことからベッドタウン化が進み、新しく開発された住宅地には当該の方言を話さない住民が増えつつあるとみられる。それでも、若年層を中心に共通語化が進んでいる名古屋市に比べれば、東濃での方言使用は顕著である。このような状況において、東濃の言語使用には大きな年代差・地域差が見られ、非常にバリエーションの豊かな状態が観察されるが、この状態が長く続くとは考えられず、一刻も早い総合的記述が望まれる。報告者による東濃方言の調査はこのような状況において2012年に開始された。

日本語諸方言のアクセントに関する研究は、これまでに言語地理学的調査から通時的考察まで様々な試みが展開され、豊富な成果を得ているが、地域的変種の中には詳細な記述が行われていないものも少なくない。本土方言で東西対立を示す多くの項目の境界線が通る岐阜県の方言のうち、アクセントに関しては、その東西の境界線上重要な西濃地方を中心とした方言の記述は豊富であるが、語形では西の特徴を示しながらアクセントは東の特徴の強い東濃西部(多治見市・土岐市・瑞浪市)方言の研究は非常に少なく、東京式アクセントの中でも内輪式とも中輪式ともとれる記述があるなど整理されていなかった。

このため、申請者はH25～H27年度の研究(基盤研究(C)課題番号25370427)で高齢層の語アクセントの体系的な記述を行うとともに、動詞の活用形を含めた文節のアクセントの観察を行ってきた。その結果、1拍2類名詞に関しては、多治見市をほぼ東西に貫いて流れる土岐川の右岸と左岸で内輪式と中輪式に区別されることが明らかになった。また、当該方言の動詞においては内輪式の傾向が強く見られるが、パラダイムの均一性や多数派の型への類推といった観点で説明可能な変化が起きていることを明らかにした。そして、本研究期間(H28～H30)の開始当初は、すでに得た音声データを整理し、形容詞のアクセントの分析に取り掛かることとなり、多治見方言の語アクセントの音韻論的記述の総括を行う準備に入っていた。

2. 研究の目的

本研究は、多治見市を中心とする岐阜県東濃地方西部の方言総合的な記述の一部として、そのアクセント、イントネーション、リズムといった韻律的諸特徴の関わりについて体系的な調査を行い、共通語との比較・分析を行うことにより、遅上がりなどの現象の分布と生起条件を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、次のとおりの手順により実施した。

(1) 初年度は、インタビュー調査により既に収集した音声データから形容詞のアクセントを整理し、論文を執筆することにより、当該方言の語アクセントの音韻論的記述を一通り完成させた。

(2) 2年目は、初年度までのアクセント記述をふまえて、イントネーションやリズムといった音響分析が必要な韻律的特徴の記述に着手した。具体的には、次の手順で行った。方言イントネーションに関する先行研究の分析 自然発話音声の収集 音声データの整理
データの音響分析作業(アノテーション) リズムの分析。

音声データ収集は、協力者は、申請者がH27までに行った方言音声調査の協力者34を中心に選定・依頼する。データ収集は、国立国語研究所などによる先行研究を参考に適切な自然発話環境を設定し、インフォーマントの許可を得てデジタル録音により行う。

また、次年度に向けてさらに協力者を増やすことと地域への研究成果の還元を目的として、積極的に地域との交流をもつ。具体的には、これまでの研究成果を市民と共有するためのHPの保守・更新を進め、老人会での講話やコミュニティラジオへの出演を行った。

(3) 最終年度は、2年目の分析から得た仮説を統計的に検証すべく、さらに音声データを収集し、結果としてリズムについて当該方言の文頭における特徴を見出した。さらにイントネーションの分析も追加することで、この特徴が語アクセントと文頭イントネーションの特徴とも相関を示すことを明らかにした。

さらに、他分野との交流において研究成果を公開するため、富山大学人文学部・富山循環型「人文知」研究プロジェクト公開研究交流会において講演を行った。

4. 研究成果

初年度の主な研究成果は、東濃西部方言の形容詞のアクセントを、活用形を含めて記述したことである。形容詞については、類別語彙による違いがなく、終止形で言えばすべて起伏式であり、内輪東京式アクセントを持つことが確かめられた。さらに、名詞と比べると形容詞は地域内で均質性が高いことも明らかになった。これまでの研究成果とあわせて、どのような語彙および活用形が内輪式/中輪式の特徴を持つかが明らかになり、中部地方においてその境界線を描くうえでのデータを提供することができたと言える。

2 年目～最終年度の研究成果としては、自然な談話による音声データの音響分析によって、次のことが明らかになった。

- (1) リズム：モーラ方言でありながら、文頭の 1 モーラ音節が長く発音される。
- (2) (1)の生起条件：文頭が 1 拍目にアクセント核を持つ（頭高型）の場合を除く。
- (3) (1)の生起条件：文頭の音節が頭子音を持つ。
- (4) 文頭のイントネーション：文頭の語が 1 拍目・2 拍目にアクセント核を持つ場合を除き、遅上がりとなる傾向が強い。（例：図 1）
- (5) (4)と(1)の相関：文頭から 3 拍目にアクセント核を持つ場合、(1)の音節長とピッチのピークの位置に中程度の正の相関関係が認められる。
- (6) 文頭の上昇幅と(1)の相関：文頭から 3 拍目以降にアクセント核を持つ場合、(1)の音節長とピッチの上昇幅に弱～中程度の正の相関が認められる。

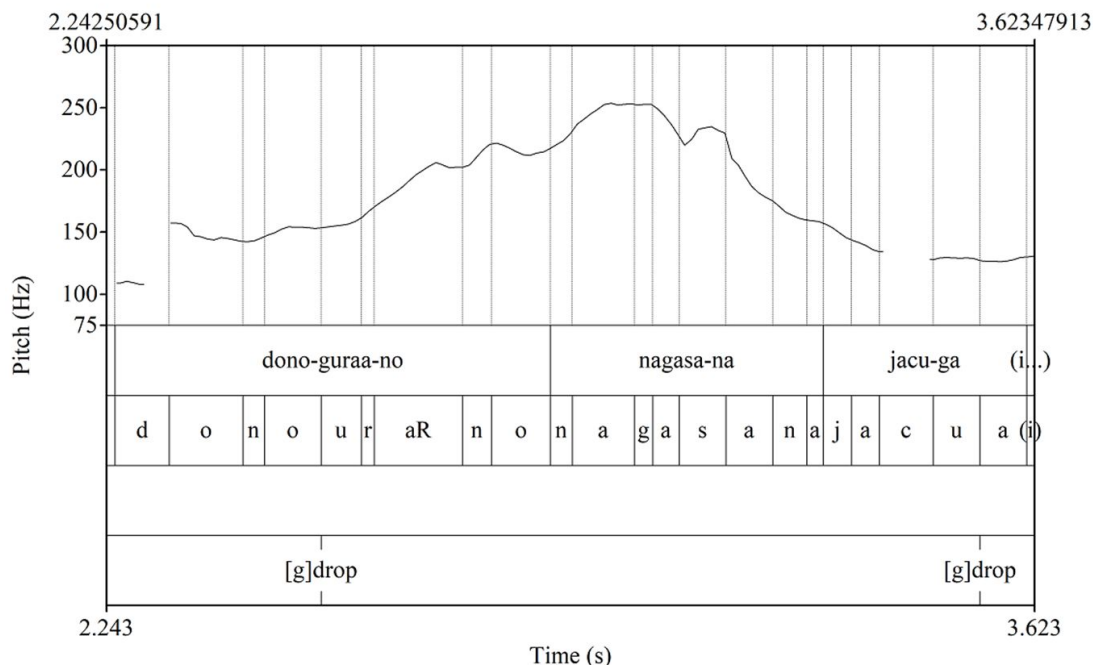


図 1：遅上がりを示すピッチ曲線の例（1935 年生まれ、多治見市、男性）
「ドノグラノナガサナヤツガ...」（どのくらいの長さのやつが...）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

安藤 智子、多治見方言における語頭の韻律的特徴 - 1 拍音節の長さとの遅上がりについて -、富山大学人文学部紀要、査読無、70 号、2019 年、109-127

安藤 智子、多治見方言における 1 拍音節の時間長についての予備的分析、富山大学人文学部紀要、査読無 69 号、2018 年、89-103

https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=16683&item_no=1&page_id=32&block_id=36

安藤 智子、多治見方言における形容詞のアクセント、富山大学人文学部紀要、査読無、66 号、2017 年、17-29

https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=14356&item_no=1&page_id=32&block_id=36

〔図書〕(計 1 件)

安藤 智子、「音声面での「語(方言)らしさ」の定義は可能か 東濃西部方言の実例をもとに」『富山大学人文学部叢書 II 人文知のカレイドスコープ』富山大学人文学部編、2019 年、102-115

〔その他〕

ホームページ等

<http://tajimi-ben.jp/>

<http://blog.livedoor.jp/tajimiben/>

コミュニティラジオ FMPiPi「そこがキーポイント！」出演（2017 年 9 月 25 日録音）

多治見市 8 区老人会講話「たじみ弁の話」(2017 年 9 月 25 日)
講演「「 語らしさ」の音声学」、富山大学人文学部・富山循環型「人文知」研究プロジェクト公開研究交流会第 12 回「人文知」コレギウム、2019 年 1 月 30 日

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。